

題名中の付属語を介して中心語に関連する語の分析による  
カテゴリーの作成  
Categorization of Title Words Connected to Representative  
Words Via Particles

浜 田 敏 郎  
Toshio Hamada

*Résumé*

As reported previously, representative words are obtained by calculating frequencies of occurrence of words in titles. Categorization of title words can be carried out by analyzing 1) word-elements directly attached to the representative word, 2) preceding or subsequent words related to the representative word via particles. Though there is much parallelism between two methods of analysis, both must be applied simultaneously so as to achieve thorough analysis.

序

- I. 中心語の概要
- II. カテゴリー作成過程とその特性
- III. 中心語等の前後にある付属語とそれに関連する語群の特性
- IV. 考 察

序

筆者は特定分野の検索語（索引語）の基礎設計のためにその分野の逐次刊行物等の記事・論文等の題名を収集、分割、集計等をして得たデータを基礎として分類表、件名標目表、シソーラス等の作成方法について考察し、一方において、この方法を裏づけるために、いくつかの論拠についても考察してきた。<sup>1)2)</sup>

今回は、検索語（索引語）の基礎設計の骨組となるカテゴリー化について焦点をあて、その確立過程において、中心語の構成分析、とくに付属語を介して中心語と結び

付く関連語の分布を考究することにする。

カテゴリーとは同一の性質を有するものの所属すべき部類であるの一応の定義をしておく。具体的には NDC, DC, UDC 等の分類表における類であり, Ranganathan<sup>3)</sup> や Vickery<sup>4)</sup> のいう Facet でもある。

I. 中心語の概要

A. 意 義

中心語は資料群における題名を分析し、計量的に選出され、特定の関心事についての資料群の総体的内容を表現するのに使用される語である。

浜田敏郎： 慶応義塾大学文学部図書館・情報学科助教授。

Toshio Hamada, Associate Professor, School of Library and Information Science, Keio University.

## 題名中の付属語を介して中心語に関連する語の分析によるカテゴリーの作成

中心語は一般に安定した分野においては一つであることが多いが不安定な分野においては二つ以上の場合も考えられる。

中心語の語形は単純なものとは限らず、いくつかの語の合成である場合もある。たとえば、「大学図書館」、「情報活動」等のような合成語である場合もある。一般により限定された分野においてこの傾向があるように思われる。

また、中心語はその異形語も考察の対象となる。たとえば、中心語が「テレビ」となった場合、「テレビジョン」、「TV」等は中心語「テレビ」の異形語として、また中心語が「ドキュメンテーション」となった場合、「ドクメンテーション」、「Documentation」等は中心語「ドキュメンテーション」の異形語としてそれぞれ処理する。

中心語について、筆者は以前に最上位語<sup>5)</sup>という表現をしたが、これは特定分野における最も包括的な概念を有する語という意味で使用したのであって、このことは本質的には異っていないのである。

### B. 中心語の選出

中心語の選出過程は、一般には、題名の収集、分割、集計等の過程を経て得たデータをもとにして中心語の選出がなされる。

#### 1. 題名を構成している用語の分割

収集した題名群を単位語に分割する。たとえば、次のようにする。

題名：|アメリカ|の|図書館|における|中国語|・|日本語|及び|朝鮮語|図書|の|記述|目録|作業|

上記の例において、|~|によって区切られた「アメリカ」、「図書館」、「中国」、「語」等を単位語と呼び、[~]で区切られた「中国語」、「日本語」、「朝鮮語図書」、「記述目録作業」を合成語(単位語を合成したもの)と呼び、「の」、「における」、「・」、「及び」を付属語と呼ぶことにする。

漢語の場合は二字を一単位語とし、ひらがな、片仮名、略字等は最小有意単位を一単位語とした。ただし、上記の題名の例のように目的によっては「図書館」を一単位語とするような例外もある。

文法論上では語の認定、<sup>6)</sup> 語の分類、<sup>9)</sup> 語の分割、<sup>9)</sup> 合成語についての考え方<sup>10)</sup> 等には各種の立場があるが、ここでは文法論的に解明するのではなく、特定分野を注目して、その分野に関連する題名群中から各種の用語の

使用傾向やカテゴリー構成等を調べるのが目的であるので、上記の文法論上の考え方に拘束されずに、ここで設定した単位語、合成語、付属語等に題名群を分割する。

#### 2. 用語の集計

得られた各単位語を基準にして出現度数を集計する。合成語の場合は結合したままの形で各単位語において集計する。この段階では題名中の付属語は集計の対象とはなっていない。

集計を完了すると単位語のみの使用度数と合成語の一構成要素としての単位語の使用度数を見ることができ、同時に合成語の場合は、各合成語の使用度数と合成語中の各単位語の結合状態も判明する。

付属語については、次に述べる中心語の選定の後に考察することになる。

#### 3. 中心語の選定

上記の過程より各単位語の全使用度数(延べ使用度数)、固有使用度数(単位語のみの使用度数)、単位語の結合状態(合成語を構成している単位語の場合)等が得られ、合成語については各結合レベルでの使用度数が判明する。たとえば「図書館」に注目すると「大学図書館」、「私立大学図書館」や「図書館員」、「図書館員養成」等のように第1の結合、第2の結合というように各レベルの使用度数を見ることができる。このことは検索語(索引語)の決定のときに役立つものである、中心語の判定の一つの要素は単位語に結合する語の種類数に関係してくる。

中心語となる要件は単位語(場合によっては合成語のこともある)の全使用度数も固有使用度数も多く、かつその前部に結合する語の種類数と後部に結合する語の種類数とが近似のものを中心語とする。

## II. カテゴリー作成過程とその特性

カテゴリーは中心語に結合する各種の語(単位語、合成語、付属語等)を分析し、調整し、総合して作成される。作成過程は大別して二つの過程がある。

第1の作成過程は合成語中にある中心語への結合語を分析する過程であり、第2の作成過程は題名中(すなわち文中と考える)にある中心語および中心語を最後尾に有する合成語が付属語を介して関連する語を分析する過程である。

第1の作成過程は既にその詳細を発表した<sup>1)</sup>ので省略する。第2の作成過程は二つにわかれ、中心語および中

心語を最後尾に有する合成語の前にある付属語を介してその前部に関連する語を分析する過程と、後にある付属語を介してその後部に関連する語群を分析する過程とである。

第2の作成過程において、中心語を最後尾に有する合成語を含めた理由は、語構成において、合成語の最後尾の単位語が、一般的には、類概念を有する語であり、その前部に各種の種概念を有する語群が結合しているからである。そして合成語は題名中において、その最後尾の単位語が付属語を介して特定の語群にかかり、一方、特定の語群は付属語を介して合成語の最後尾の単位語にかかるので、カテゴリー作成の精度を高めるために、上記のような合成語を含めたのである。

以上の各過程で作成されたカテゴリー群を最終的には一括して、相互に調整し、一つのカテゴリーを構成するのである。

#### A. 題名中における中心語および中心語を最後尾に有する合成語が付属語を介して関連する語群の分析

この分析過程は文脈の分析とも考えられるもので、題名中の中心語および中心語を最後尾に有する合成語が付属語を介して関連する語群を分析してカテゴリーを作成することである。

ここで中心語を最後尾に有する合成語とは例えば、「図書館」を中心語とすれば、「大学図書館」、「国立大学図書館」、「国公立大学図書館」等のように中心語「図書館」が最後尾にあり、それが類概念をあらわす語となっている合成語のことである。これからこのような中心語および中心語を最後尾に有する合成語を一括して中心語等という表現形式を使用する。

次に中心語等が付属語を介して関連する語群について例示する。

「図書館とドキュメンテーション」、「図書館・公民館におけるレコードの整理」、「大学図書館における目録体系の問題」、「イギリスにおける公共図書館の組織化と協力」、「アメリカの公共図書館における主題別部門制の発展」

これらの題名中——で示した語が中心語等であり、——で示した語が付属語であり、付属語の前後にある中心語等以外の語が第1次的に関連する語群である。

##### 1. 中心語等の前部にある付属語を介して関連する語群の分析。

中心語等の前部にある付属語を介してその前部に関連する語群を分析してカテゴリーを作成することである。

先に合成語中において中心語の前部結合の語群を分析したのであるが、ここでは題名中において中心語等の前部にある付属語を介して結合する語群を分析することになる。

前回と同様に中心語「図書館」について調べて見る。ここでは中心語等であるから中心語「図書館」および「～図書館」がその対象となる。カテゴリーは次のようなものがある。

- a. 地域（例：「アメリカの図書館…」、「アメリカにおける公共図書館…」等）
- b. 時代（例：「帝政ロシア時代の図書館…」、「解放後の中国図書館…」等）
- c. 他との関係（比較，因果等）（例：「図書と図書館…」、「音楽と図書館」等）

カテゴリーaとbは双方とも大体において同種同数の関連語群があったことが特徴である。a. 地域のカテゴリーと、b. 時代のカテゴリーにおいては付属語「の」と「における」に関連する語群のみから出来たものである。c. 他との関係のカテゴリーは「と」、「・」の付属語を介して関連する語群から得られたもので、最もばく然としたものであり、比較的包括的な内容を持っていて、この分野の一つの特性を発見するのに重要な拠点とも考えられる。

一般的傾向としては合成語の分析におけるよりも明確に共通要素的な面を示す地域や時代の特性が出ていることである。また合成語の分析においては見られない特性として「と」「・」等を介して関連する語群の分析であり、これは特定分野における一つの大きな特性を指示している。しかし、これは最終的には各過程から出たカテゴリーを考察して調整する必要があるカテゴリーである。また合成語分析の過程で作成されたカテゴリー数に比して少いこともこの過程の特徴である。

##### 2. 中心語等の後部にある付属語を介して関連する語群の分析

中心語等の後部にある付属語を介してその後部に関連する語群を分析してカテゴリーを作成することである。先に合成語中の中心語の後部結合の語群を分析したのであるが、ここでは題名中において中心語等の後部にある付属語を介して結合する語群を分析することになる。

前回と同様にカテゴリー化を行うと次のようなカテゴリーが出来る。

- a. 図書館の本質（例：「公共図書館の教育性と非教育性」、「図書館のメカニズムとヒューマニティ」

## 題名中の付属語を介して中心語に関連する語の分析によるカテゴリーの作成

等)

- b. 職員 (例:「町村図書館における職員の問題」,「…図書館における歴史技術者」等)
- c. 資料 (例:「アメリカ図書館における極東資料」,「図書館・公民館におけるレコードの整理」等)
- d. 施設 (例:「公共図書館の建築について」,「公共図書館における柱間と家具配置の寸法関係について」等)
- e. 活動 (例:「公共図書館の集書面における図書館協力の問題」,「図書館・公民館におけるレコードの整理」,「大学図書館におけるレファレンス・サービスの問題」,「私立大学図書館の管理」,「イギリス公共図書館の組織化と協力」,「移動図書館の読書活動」等)
- f. 利用 (例:「公共図書館と大学生」,「市立図書館と地域住民の結びつきに関する実態調査報告」,「大学図書館における学生利用調査」等)
- g. 類縁機関 (例:「南欧の図書館・文書館を訪ねて」,「図書館・公民館におけるレコードの整理」等)
- h. 事情 (例:「短期大学図書館の実情と諸問題」,「学校図書館の動向」等)
- i. 他との関係 (比較, 因果, 影響等) (例:「図書館とドキュメンテーション」,「図書館・情報・機械」,「図書館と食物」,「図書館と商業主義」等)

上記の例において e. 活動のカテゴリーのもとになった関連語群は種類数, 出現度数において他のカテゴリーに比し多いことが見立っている。合成語の場合と大体において類似しているが, 各カテゴリーの作成のもとになった関連語群はこれに比してより詳細な概念を有する語群が多い。また合成語の場合に見られなかった f. 利用, g. 類縁機関, i. 他との関係等の新しいカテゴリーが出現している。

一般的にいて, **中心語等**の後部にある付属語を介して関連する語群を分析して作成されるカテゴリーの特性は合成語の場合と同様にその分野の本質的, 構成要素的, 動的な面の特性があり, カテゴリー内容がより詳細な関連語をもとにして作成されていることが特徴である。また A1 と同様に i. 他との関係のように「と」, 「・」等を介して関連する語群の分析であり, これは特定分野における特性を指示している。これは最終的には全体的な調整を必要とする場合の重要な一面である。

### B. 四つの作成過程によって得られたカテゴリー群の調整と総合

前報の合成語分析および上記 A1, A2 の過程で各カテゴリー群が作成されたのであるが, これらを総体的に見て相互に調整し特定分野のカテゴリーを完成しなくてはならない。それには先づ合成語中の**中心語**の前部結合語群と題名中の**中心語等**が付属語を介して前部に結合する語群の分析過程で作成されたカテゴリーを調整することと合成語中の**中心語**の後部結合語群と題名中の**中心語等**が付属語を介して後部に結合する語群の分析過程で作成されたカテゴリーを調整することである。これは前述のように相互に類似点が多いからである。この調整の過程が終れば, 次に双方の調整結果から得られた二つのカテゴリーを調整することになる。一方「と」, 「・」等の付属語を介して得られた他との関係を示すカテゴリー, すなわち総括的, 本質的な特性を有するものに対して十分注意を払って調整する必要がある。更に必要に応じてサブのカテゴリーを作成する。

### C. 各作成過程によって得られたカテゴリーの比較

このように単位語, 合成語(単位語の合成体), 題名(単位語, 合成語, 付属語の合成体, すなわち文と考える。<sup>11)</sup>)へと題名群を分析してきたのである。

ここで明らかになった特性は合成語において**中心語**の前に直接結合する語群においても, **中心語等**の前にある付属語を介して関連する語群においても作成されるカテゴリー群には類似した点が多い。

一般分類表にある地理区分, 時代区分のような共通要素と特定の分野にのみ共通な固有の共通要素等が得られる。

また合成語において**中心語**の後に直接結合する語群においても, 題名中において**中心語等**の後にある付属語を介して関連する語群においても作成されるカテゴリーには類似した点が多い。

このカテゴリー群は特定分野における主要なカテゴリー群と一般にも共通的に考えられる共通要素のカテゴリー群とが作成される。主要なカテゴリーとしてはその分野の本質的なカテゴリー, 活動のカテゴリー, 構成要素のカテゴリー等であり, 共通要素のカテゴリーとしては, 事情・歴史, 団体, 集会, 各種文書形式(記事, 調査報告書)等であり, 一般の分類表における形式区分に相当するものである。

以上のことから**中心語**および**中心語等**の前にある関連語を分析した結果と**中心語**および**中心語等**の後にある関連語を分析した結果との相異は明確であり, この二つグループが得たカテゴリーを総合して初めて特定分野の特

性を把握することができる。

しかし合成語分析と題名の構文分析とにおいてはこれらの結果は比較的類似の点が多い。このことは日本語の漢語の造語過程において、漢語を組み合わせる行き、あたかも句のような機能を持たせていることに起因しているように考えられる。故に付属語を介して表現した場合とあまり差がないと推察される。

ただし特異の点は付属語「と」「・」等を介して関連する語群の分析である。このタイプを分析すると特定分野の総記的カテゴリーと本質的カテゴリーが主であり、特に後者の本質的カテゴリー作成において参考になるものである。これは特定分野の特性を内在している重要なものとして考察する必要がある。とくにカテゴリー作成後において、個々の検索語（索引語）の検討においても参考になることがある。一般の件名標目において「宗教と科学」、「新聞と放送」、「ラジオとテレビ」等の形式が見られるように、特定分野において「と」を注目することにより、このような形式を得ることができる。

また構文分析で得た関連語群の方が合成語分析で得た関連語群より比較的多種のものがあり、かつ具体的な概念を指示している。このことは前者においては中心語のみならず、中心語を最後尾に有する合成語の形式も含めて分析するのでこのような結果となったと思われる。

### III. 中心語等の前後にある付属語とそれに 関連する語群の特性

題名中において中心語等の前後にある付属語群の種類やこれらの使用頻度とこれら付属語に関連する語群の特性について考察する。

まづ、これに先立って中心語等の前後にある付属語や関連語について調査をした。題名群を「図書館界・第6巻（昭和29）——第17巻（昭和40）」の各巻末の件名索引と「情報管理・第1巻（昭和33）——第8巻（昭和40）」の総索引・Ⅱから取り出して前述の各種の過程を踏んで分析した。

総題名数 1022 titles から中心語等を含む題名 169 titles を得た。この内訳は「図書館界」から 455 titles でその中 76 titles が中心語等である「図書館」、「～図書館」を含んでいた。「情報管理」から 567 titles でその中 93 titles が中心語等である「情報」、「～情報」、「ドキュメンテーション」、「～ドキュメンテーション」、「情報活動」、「～情報活動」を含んでいた。ここで偶然かも知れないが双方とも中心語等を含む題名数は総題名

数の1/6になっていることである。これはもっと多面的な調査をしなくては最終的には決定できないことである。

なお「情報管理」の場合に中心語が一つでなくて「情報」、「ドキュメンテーション」、「情報活動」の三つの語である。このことは中心語はただ一つだけではないというよい例である。そしてこれらを個々に考えるのではなく、三つの中心語を総体的に把握してカテゴリー作成等を行うことが必要である。

ここから得た付属語の種類は15種で、これらの延べ使用度数は216であり、このうち「の」、「における」の二つの付属語の占める使用率が70%前後であって、その中でも「の」の使用率が最高で50%前後を占めている。「図書館界」の題名群においては二つの付属語の使用率が70%であり「の」の使用率が47%である。「情報管理」の題名群においては二つの付属語の使用率が79%であり、「の」の使用率が59%である。このことから題名中に「の」、「における」が非常に多く使用されていることが判明した。

また、これら二つの付属語「の」、「における」が中心語等に対して前部にあるか、後部にあるかによって使用率が異なる。「図書館界」においては前部にあるのが13%であり、後部にあるのが56%である。「情報管理」においては前部にあるのが37%であり、後部にあるのが39%である。この差異については「中心語」の特性に影響していると思われる。すなわち、中心語が抽象的概念を有する語か、具体的概念を有する語かによって付属語に影響しているように思われるがまだこれについては結論が出せない。

「の」、「における」の付属語に関連する語群について考察して見る。まず中心語等の前部にある語群について考察して見ると、地域（大陸、国、地方等の名称）、機関（企業、固有の企業体、団体等の名称）、時代（特定の時代、年度等）、主題（科学、化学等の分野）の4つのカテゴリーに分割できる語群である。このうち、地域が全体の46%を占めており、順次、機関、時代、主題のカテゴリーの順になる。この調査においては時代のカテゴリーに入るべき語群は「における」の付属語は一つも使用されていなかった。

上記のことを例示すると次のようである。

地域：南欧の図書館、アメリカのドキュメンテーション、イギリスにおける公共図書館、欧米の情報活動等

## 題名中の付属語を介して中心語に関連する語の分析によるカテゴリーの作成

機関: 企業の情報活動, ~社の情報活動等

時代: 帝政ロシア時代の図書館, ~年度の情報活動等

主題: 化学分野のドキュメンテーション等

これらのカテゴリーについて一般分類表と比較して見ると共通要素の傾向が強い地理区分や時代区分に相当し, UDC における固有補助標数の対象となる機関, 主題のカテゴリーが考えられる。また Ranganathan の考える Space, Time もこのカテゴリー群と関係がある。

ここの分析結果は合成語中における中心語の前部結合の語群分析に比して明確にこのカテゴリーを構成できるのが特徴である。

次に後部にある語群について見ると性質, 活動, 構成, 方法, 事情の5つのカテゴリーに分割できる語群である。ここのカテゴリーは特定分野においてその特性が反映するところであって各カテゴリー内の詳細については勿論のこと5つの主たるカテゴリーの構成においても変化が考えられる。付属語「における」に関連する語群には性質, 方法, 事情のカテゴリーに入るべき語群は皆無であった。これは逆に「における」は性質, 活動, 構成のカテゴリーに関係する語群と結合しないことであり, 「の」はすべてのタイプのカテゴリーに関係する語群と結合していることになる。

上記のことを例示すると次のようである。

性質: 図書館の役割, 図書館の教育性と非教育性, ドキュメンテーションの科学的基礎, 情報活動の必要性等

活動: 情報の収集, 情報の蓄積, 図書館の管理, ドキュメンテーションの社内導入, 図書館におけるレファレンス・サービス等

構成: 図書館の分館網, ドキュメンテーションの技術士, 図書館の潜在利用者

方法: 情報の使い方, 情報活動の進め方等

事情: ドキュメンテーションの現状, 情報活動の動向, 図書館の実情等

これらのカテゴリーの中で関連語群の比較的多いのは活動と事情のカテゴリーである。

一般分類表において事情のカテゴリーは事情・歴史として形式区分として取扱われている。これは一般の分類表にある地理区分, 時代区分, とともに共通要素として準備されているものである。性質, 活動, 構成等のカテゴリーは特定分野の主要な要素となるものである。活動のカテゴリーは Ranganathan の Energy や Vickery

の Action, Operation, Process 等のカテゴリーに相当し, 構成のカテゴリーはときには Ranganathan の Personality のカテゴリーになり, また Matter のカテゴリーとなるものである。

前にも言及したが, 「における」は「図書館」を中心語とするときは非常によく使われて「図書館」の**中心語等**の後部にあるものは20%であるのに対し, 「情報」, 「ドキュメンテーション」, 「情報活動」の**中心語等**の後部にあるものは僅かに2%である。このことは「中心語」の性質によるものと思われる。「図書館」は一定の場所を占有しており具体的に把握できる対象であるが, 「情報」, 「ドキュメンテーション」, 「情報活動」においては一定の場所を占有せず, 具体的に把握できる対象でないでこれらの**中心語等**の後部には「における」が少いと思われる。逆にこれら中心語等の前部にある「における」は地域, 機関等で一定の場所を占有しており具体的な対象として把握できるのでこの付属語がよく使用されるのである。しかし, このような場合において「の」でも「における」でも使用されていて相互に置換しても不自然でないし, これに対しての明確な使用方法もないようである。

前述のように「の」, 「における」の使用率が70%以上であるので残りの付属語の使用率は30%以下ということになる。

このうち「と」の使用率が比較的高く, 特に「**図書館界**」の中心語等を含む題名中で20%を占めている。これに対して「**情報管理**」においては4%である。しかし「と」については注意する必要がある。これから総記的カテゴリー, 性質のカテゴリー, 活動のカテゴリー, 構成のカテゴリー等に関連する語群を見出すことが多いからである。例えば, 総記的なカテゴリーとして「図書館と食物」, 性質のカテゴリーとして「図書館とドキュメンテーション」, 活動のカテゴリーとして「学校図書館と公立図書館との協力」, 構成のカテゴリーとして「大学生と公共図書館」等がある。これに類似した付属語として「・」, 「および」, 「ならびに」があるが, これらは**中心語等**の前部とか後部とかに分割せずにこのままの形でカテゴリー化を考察した方が便利である。

この他に「としての」, 「のための」, 「について」, 「に関する」, 「による」, 「は」, 「にも」, 「を」, 「される」等があるがこれらの使用率は非常に低く, しかも関連する語群を考察すると, すでに「の」, 「における」, 「と」を介して関連する語群の分析をもとにして作成されたカテゴリーのどこかに入ってしまうものが殆んどである。

## IV. 考 察

使用率の高い付属語「の」、「における」について先づ考察して見る。題名中で、ある所では二つの付属語は類似の機能を有し、一方、これらを使用せず合成語の形で表現しているところもある。

たとえば題名中には「アメリカの図書館…」、「アメリカにおける図書館…」、「アメリカ図書館…」等の形式が見られ、これらの意味はすべて同じことを指示しているのである。推測すれば、題名作成過程において、あまり「の」の使用が連続するために、ときには「における」を使用し、あるときは合成語の形にしたりしているのである。

「の」の使用法は非常に広範囲で、いろいろの意味にとれるものである。このような「の」について吉田金彦は次のように述べている。<sup>12)</sup>

「の」が <所有> <所属> を基本的に意味するところから、派生的に種々の <関係> <範囲> <目的> <基点> <選択> などの意を表わすに至る。「…に関する」「…に対して」「…について」「…における」「…のため」「…によって」「…のなかの」などの表現に言い換えられるものが多い。

国立国語研究所の「現代語の助詞・助動詞」<sup>13)</sup> によって「の」の用法について調べると格助詞の「の」は大別して五つに分かれ、各事項が更に細分されており、「の」の使用の多様性がうかがえられる。ここでは直接関係のあるものについて列記すると次のようなものがある。

1. 体言について、後続の体言がその体言に所属するものであることを示す。
  - a. 所有主（後の体言が前の体言の持物・属性などの場合）
 

例： 図書館の家具, 図書館の教育性, 図書館の事情
  - b. 所属の団体（“～の属する”の意）
 

例： 図書館の職員, 大学の図書館
  - c. 存在の場所・位置
 

例： アメリカの図書館, アメリカのドキュメンテーション。
  - d. 存在の時刻・時期
 

例： 帝政ロシア時代の図書館, 解放後の中国図書館
2. 体言について、その体言が後続の体言の属性に当ることを示す。

## a. 性質・性格・状態

例： 化学分野のドキュメンテーション

3. 結びつけられる二つの体言のうち、後者が動詞の連用形またはサ変動詞の語幹となる体言（主として漢語）の場合。

## a. 動作の主語

例： 図書館の協力

## b. 動作の客語

例： 情報の収集, 図書館の設計, 情報の使い方, 情報活動の進め方

この国語学的分類と前述の中心語等から得たカテゴリー群とを比較して見る。機関、地域；時代のカテゴリーはそれぞれ 1-b, 1-c 存在の場所・位置；1-d 存在の時刻・時期に相当する。主題のカテゴリーは 2-a 性質・性格・状態に相当する。性質のカテゴリーは 1-a 所有主に相当し、活動のカテゴリーは 3-a 動作の主語と 3-b 動作の客語に相当し、構成のカテゴリーは 1-a 所有主と 1-b 所属の団体に相当し、方法のカテゴリーは 3-b 動作の客語に相当し、事情のカテゴリーは 1-a 所有主に相当する。

1-a の所有主は三つのカテゴリーに関連があり、一方、活動のカテゴリーは 3-a 動作の主語と 3-b 動作の客語の二つに関連している等々で完全に一致はしないが、この比較によって一応「の」に関連する語群をもとにしてカテゴリーを作成した論拠ともなる。

次に「における」について調べると次のようになる<sup>14)</sup>

1. 動作・作用の行われる空間的な場所の定位・位置を示す。いわば、事物の存在する場所。また、事物を存在させる場所
 

例： イギリスにおける公共図書館
2. 動作・作用の行われる抽象的な場所の定位を示す。（“の”の使用も可）
 

例： 化学分野におけるドキュメンテーション
3. 動作・作用の行われる時、場所を示す。
 

例： 最近における中国図書館

これらの項目で1は「の」における 1-c と同じであり 3は「の」における 1-d と同じであり、2は「の」を使用しても可能である。また、このことは地域、機関、時代、主題のカテゴリーを作成したとき、大部分が「の」、「における」であったことから明らかである。故に「の」と「における」を置き換えても不自然が起らないことが多いのである。

## 題名中の付属語を介して中心語に関連する語の分析によるカテゴリーの作成

次に「と」について考察する。ここで使用される「と」は並立助詞であり、国立国語研究所の「現代語の助詞・助動詞」<sup>16)</sup>によれば。

“いくつかの体言を列挙して一団とする。また、組合せを表わす”としている。この中に二つのタイプがある。1) [～と～と] の形と 2) [～と～] の形である。題名から得られるもので一番多い形は 2) [～と～] である。例えば「ドキュメンテーションと図書館」である。しかし、1) [～と～と] の形も図書館関係の題名にある。例えば「学校図書館と公共図書館との協力」である。

「と」について国語学的観点からすれば比較的簡単に処理されているが、カテゴリー作成の観点からすると特に注意を払わなくてはならないところである。「～と～」で結ばれる二つの関係はときには非常に意味深長なものがあり、一方「～と～」としてよく出現する題名のタイプもある。このような「と」により結合する**中心語等**の場合には、特に前部後部に分割して関連する語群を分析する必要はなく、このような題名は一括して処理した方が便利である。

次に合成語について考察して見る。ここでいう合成語は二つ以上の単位語の結合であるから、合成語の中には文法論上でいう連語に属するような合成語も相当数ある。故にこのような合成語は一種の句となって題名中に使用されている。たとえば「図書館管理」、「図書館員養成」等がそれである。

このような観点から合成語を見ると、中心語の前後結合の語群を分析することは、連語において一種の文脈の分析と考えることができる。このことに関して森岡健二は次のように述べている。<sup>17)</sup>

「連語」が主として「語＋語」の構造をとるとすれば、文法論的には、その構造は構文論の問題にはいるといわなければならない。つまり「工場の＋経営」がシンタクティカルな問題である以上、「工場＋経営」も、また、それと同じ扱いをすべきである。その点、「連語」は一種の「句」としてもよい。

このような連語は題名を作る場合に当然考えられることである。すなわち、非常に短い文として表現するには、なるべく付属語を省略して題名を作る傾向になるからである。ここで、題名中から合成語——中心語を含む——を分析することは非常に短い文を分析することと等しくなる。またこの分析によって得られたカテゴリー群が比較的**中心語等**を含む題名を分析して得られたカテ

グリー群に似ているのである。しかし精度をあげるにはどうしても合成語レベルと題名レベルの双方の分析結果を合わせて調整し、総合されたカテゴリーを作成することが望ましい。しかし、特定分野のカテゴリーの概要だけを知ればよい場合は合成語の分析だけである程度の推測はつくはずである。

もしも用語辞典、図書の巻末索引、特定資料の記事の文章から用語を収集してカテゴリーを作成したらどうであろうか。この場合にまず直面する問題は用語収集の基準である。またⅡ章のAの過程を踏むことが不可能か、非常に困難になるのでカテゴリーの作成は期待できない。用語辞典から収集した場合は、収集された用語はいわゆる単語であって、ここで取扱っている合成語を完全に収集することは不可能である。また中心語を判定することは、比較的安定している分野では推察も可能であろうが、まだ不安定な分野や境界領域を扱っている分野においては中心語の判定が困難である。故に特定資料の文章を取り出してⅡ章Aの過程をやることは非常に困難であり、たとえ中心語があったにせよ、長い文章を分析することは困難な仕事である。

本来、情報検索のためのカテゴリーおよび検索語群(索引語群)は常に利用者の要求に合うように、継続的に再編成されねばならないものであるから、常に、容易にカテゴリーの改訂が可能な手法を考えると題名分析法によることが最も簡便であるように思われる。

以上の考察から次のようなことが明らかになった。

1. 題名中の**中心語等**との関係にある「の」、「における」の使用率が非常に高く、なかでも、「の」の使用率が最高である。「の」の特性はこの使用において多様性を有していることがこのような使用率になったと思われる。また、特定の機能を有する「の」と「における」は相互に置換できる関係があるので「における」の使用率も「の」に次いで高いのだと思われる。「と」の機能は特別なもので取扱いについて注意を要するものである。

カテゴリー作成過程の手数を省略する方法として付属語「の」、「における」、「と」の三つだけに注目し、他の付属語は省略することも可能である。

2. 合成語は一種の句のような性格を有しているので、中心語を含む合成語に対しては一種の文脈の分析がなされたわけであり、その結果がカテゴリーにも現われており、合成語分析で得られたカテゴリーと第Ⅱ章Bの過程で得られたカテゴリーが似ている



点が多い。ただし、詳細度においては差異が見られる。

3. 題名分析における実施面、すなわち、語の分割、語の分析、カテゴリー化等の過程においては、現在の国語学、文法論等の知識は直接的にはあまり参考にならない。むしろ、分析の目的を明確にし、所定の方法で一貫性のある処理をやるのが効果的である。
4. カテゴリー作成過程においては、すべての過程を踏むことが必要である。すなわち合成語分析と第二章Bの過程を踏むことが必要である。
5. カテゴリー作成のために、題名群は最も圧縮された諸情報を提供してくれるものであるし、これら題名群を使つてのカテゴリー作成過程は最も効果的にやることができる。ここでは1題名に1記事内容という1対1の対応を考えるのではなくて、特定分野の題名群の総体と記事内容の総体との対応を考えているのである。
- 1) 浜田敏郎. “題名分析法による検索語基礎設計の応用について,” *Library and information science*, no. 6, 1968, p. 123-154.
- 2) 浜田敏郎. “題名とその用語の特性——題名分析法の観点から,” *Library and informaton science*, no. 7, 1969, p. 79-85.
- 3) Tyaganatarajan, T. “A study in the development of colon classification,” *American documentation*, vol. 12, no. 1, Jan. 1961, p. 270-278.
- 4) Vickery, B. C. *Faceted classification, a guide to construction and use of special schemes*. 2d ed. London, Aslib, 1960. p. 9-11.
- 5) 浜田敏郎. “題名分析法による検索語基礎設計の応用性について,” *op. cit.*, p. 124.
- 6) 徳田政信. 日本文法論. 東京, 風間書房, 1966. p. 289-293.
- 7) 鈴木一彦. 言語過程の成立と文法 <松村 明等共編. 文法論の展開. 東京, 明治書院, 1968> p. 205-206.
- 8) *Ibid.*, p. 206-210.
- 9) 国立国語研究所. 現代雑誌九十種の用語用字 (第1分冊) 総記および語彙表. 東京, 秀英出版, 1962. p. 6-14.
- 10) 森岡健二. “日本文法体系論,” *文法*, vol. 2, no. 11, 1970. 9, p. 137-145.
- 11) 浜田敏郎. “題名とその用語の特性,” *op. cit.*, p. 80-82.
- 12) 吉田金彦. “現代文における「の」の意味・用法,” *文法*, vol. 2, no. 11, 1970. 9, p. 20-22.
- 13) 国立国語研究所. 現代語の助詞・助動詞 一用法と実例一. 東京, 1951. p. 155-171.
- 14) *Ibid.*, p. 135-138.
- 15) *Ibid.*, p. 117-119.
- 16) 森岡健二. *op. cit.*, p. 144.